

今日は稲刈り、市の広報を見て参加の幼児を連れた家族や、守る会の会員の老若男女、あわせて20人余が奥の谷の稲田に集まった。空は青く汗ばむほどの上天気。作業内容をみんなで確認の後、うち米の田へ。次々と黄金色の稲が刈られ、束ねられ、稲木に掛けられて行く。稲刈りに飽きた子供達は、以前みかんを貯蔵していた小屋を改装し、今は宿泊施設となった小屋を探検、2階に上がるハシゴ階段を上がったり下りたり忙しい。竹とんぼを飛ばす子、カマキリに興味があるが捕まえられる子。「カマキリの腹からハリガネムシ出たぞ〜」。小屋周辺は田んぼ以上に賑わっている。昼食は子供達も材料を切って作った「豚汁」と釜戸炊き2升5合の羽釜のご飯。奥の谷では、米・野菜作りの他にも雑木林の下刈り、人工林の間伐、竹林の整備、竹炭作り、ミツバチの飼育、間伐材や稲藁、蔓、竹などを使う里山工作、各種観察会等が行われ、大人と子らの絶好の活動拠点となっている。笑顔と歓声の絶えない奥の谷の自然、ずっと残したい。奥の谷みかん小屋は、近鉄「滝谷不動駅」から東へ約1.5km歩いて約30分です。



奥の谷のみかん小屋周辺



刈り取りの終わった田んぼ

光明池は、堺市と和泉市にまたがる人工のため池です。ため池の造成は灌漑用水と飲料水利用を目的に1931年から始まり、谷をせき止め、中央の山を削りその土を使って幅350m・高さ26mの本堤防が築かれています。本堤防は、4月と11月の2回草刈が行われる広大な草地となっています。改修工事でも外側は手つかずのようで泉北丘陵の本来の植生が残っていると考えられます。

2012年より有志で広大な堤防の一角の植物調査・観察を続けています。土手の植物は、4月はスミレ・タツナミソウ・ワラビから始まり、6月は、カキラン・カモノハシ・コガンピ・イシモチソウなど希少な植物を次々見ることができます。夏にはキキョウ・マルバハギ・ノギラン・オトギリソウ・秋はツリガネニンジン・ワレモコウ・リンドウ・アキノキリンソウなど調査が楽しめる草地です。春はツバメが飛び、秋には秋の七草のうち5種を観察できます。カヤネズミの巣も毎年見つかリ、昨年は死骸を見つけました。これからもこの貴重な草地と植物を見守っていきたいと考えています。



光明池本堤防



カキラン(毎年増えています)